



双生児研究会ニュースレター  
《第1号》



Newsletter of the  
Japan Society for Twin Studies

1987年 4月15日 発行

双生児研究会ニュースレターの  
発刊にあたって (双生児研究会会長 井上英二)

日本にも、やっと双生児研究会ができた。今までもふたごでの研究をする人は決して少なくなかったが、おたがいの連絡は必ずしも円滑という訳には行かなかった。これは、ふたご研究の主要な流れが双生児研究法を使った遺伝と環境の分析にあったからで、銘々の関心の対象が広く分散していたからではないかと思う。しかしそれらの間に共通する課題も少なくない。ふたごでの発育の特徴とか卵性診断、あるいは量的形質の分析法などがその例である。双生児研究会は、このような共通の課題を解決するいとぐちをつかむために役に立つに違いない。そして、今回発刊されることになったこのニュースレターも、同じ目的に使われるようになってほしい。直接解説のようなものが掲載されなくても、誰に尋ねればこの問題の相談にのってくれるということがわかるだけでも、刊行の意義は有るのではなかろうか。研究会の機関誌としてのニュースレターがこのような役割を果たし、発展することを望みたい。

目次

双生児研究会ニュースレターの発刊にあたって	(井上英二)	..... 1
双生児研究会の創立について	(浅香、今泉、松井)	..... 2
双生児研究会規約		..... 3
双生児研究と文献検索	(松井一郎)	..... 4
ツインマザーズクラブ	(天羽幸子)	..... 6
聖書の中のふたご達 (ふたご研究の周辺 No1)	(山田一朗)	..... 7
幹事会議事録	(事務局)	..... 8
双生児研究会第2回学術講演会開催のお知らせ	(吉田啓治)	..... 9
<u>昭和63年1月9日(土) 1:00~5:00pm 於 東大山上会館(予定)</u>		
会員募集のお知らせ	(事務局)	..... 10
国際ふたご研究学会について	(今泉洋子)	..... 10



## 双生児研究会の創立について

㊦ わが国の双生児研究に携わるひとびとの間で双生児研究会の創立が論議され、第1回設立準備会（昭和61年11月29日、出席者17名）を経て、第2回設立準備会並びに創立総会が昭和62年1月17日（土）午後2時から4時まで東京大学山上会館において開催された。設立準備会の運営は世話役の浅香昭雄、今泉洋子、松井一郎の3名がこれに当った。一方、総会の議長は岡島道夫（東京医歯大教授）がつとめ下記の出席者をえて双生児研究会が創立された。

《出席者》浅香昭雄、芦沢玖美、安藤寿康、井上英二、今泉洋子、岡島道夫、岡田知雄、小田昇、金子哲也、菊地白、黒木良和、近藤郁子、佐藤達哉、寿円梅子、杉尾嘉嗣、杉野芳代、高島敬忠、高野幸路、東郷正美、永井好弘、中田稔、中村泉、南光進一郎、西田尚史、西原信彦、野中浩一、早川和生、檜田すが、藤木慶子、藤田孝子、古庄敏行、正木基文、松井一郎、三橋俊夫、三浦邦彦、村田紀、森田香、森本兼麩、山崎佳寿子、山田一郎、山本奈智子、吉田啓治、吉田博子

【設立準備会（第2回）】 昭和62年1月17日（土）14:00-15:00  
議事（浅香昭雄）

1. 経過説明（今泉洋子）
2. 規約案の検討（松井一郎）

【創立総会】 昭和62年1月17日（土）15:00-16:00  
議事（議長 岡島道夫）

1. 規約の審議
2. 人事

会長には井上英二（東京大学名誉教授）が満場一致で推薦された。次いで、幹事には浅香昭雄、天羽幸子、今泉洋子、岡島道夫、佐藤幸男、中田稔、野中浩一、早川和生、松井一郎、森本兼麩、吉田啓治の11名が選出された。

3. 会の運営は、11名の幹事を中心に行うことに決定した。

【記念講演会】 総会に引き続き16時5分から記念講演会に移り、井上英二会長が『日本におけるふたご研究の歴史』について1時間にわたり講演を行なった。講演終了後、17時30分から山上会館談話室ロビーで懇親会が開かれた。（敬称略）

（浅香、今泉、松井記）

## 双生児研究会規約

- 第一条 [名称] 本会は双生児研究会と称する。
- 第二条 [目的] 本会は双生児の研究を通じて人類の福祉に貢献することを目的とする。
- 第三条 [事務所] 本会は事務所を東京都文京区本郷7丁目3番地1号 東京大学医学部保健学科内におく。
- 第四条 [入会] 本会の目的に賛同するものは本会に入会することができる。本会に入会しようとするものは、住所、氏名、職業を明記して本会事務所に申し込むことを要する。
- 第五条 [会員] 会員は個人会員をもって構成し、年会費として 3,000 円を前納するものとする。
- 第六条 [事業] 本会は年一回以上講演会を開き会員の交流を深める。また、本会は双生児研究に関する情報を集積し、会員に供することとする。その他、会員連絡紙等を発行・配布する。
- 第七条 [総会] 本会は、毎年一回総会を開く。会務の報告、規約の改正、役員を選定、その他の議事を行う。
- 第八条 [役員] 本会に次の役員をおく。会長一名、幹事若干名。
- 第九条 [その他] 本会の事務年度は暦年による。

付記 本規約は昭和62年1月17日より実施する。

# 双生児研究と文献検索

(国立小児医療センター、松井一郎)

双生児研究に限らずどの研究でも関連する文献の検索・整理は欠かすことは出来ません。最近ではデータ通信の利用で、医学図書館(室)はもとより研究室・書斎のデスクサイドから容易に医学および関連領域のデータベースにアクセス出来るようになったので、その概略を紹介し、本研究会・会員の利用に役立てたいとおもいます。

## 1) 文献検索の能率化

十余年前からコンピュータを使って文献検索が出来るようになりました。分厚いIndex Medicusを年次にわたり調べなくても10分位で目的の論文を拾い出すことが可能になりました。それは文献のデータベースセンター(日本科学技術情報センター=JICST)と図書館の端末機を通信回線で結び(JOIS=JICST ON-LINE INFORMATION SYSTEM)、直接利用することが出来るようになったからです。図書館の係員が相談にのってくれますが、最近では通常のパソコンに簡単な通信装置を付け、電話回線を使って自分で検索をすることも出来ます。医学中央雑誌も1981年から検索が可能です。

## 2) 検索の例

データベースを構築し、利用する際の約束ごとのうち用語の体系をシソーラス(thesaurus, 索引用語集)と呼び、シソーラスの中から《双生児》と《奇形》、《双生児》と《心理》、など検索の焦点を絞って必要な論文を出力させます。表1は1980年以降のINDEX MEDICUS(データベース化されたものをMEDLINEと呼ぶ)で会員の希望の文献検索を行った例です(森本、三浦)。1980年以降のMEDLINEファイルの収録件数は約153万件ですから確かに便利と言えるでしょう。双生児に関連する論文収録数は年間300-400です。抄録をつけて出力することもできます。

## 3) 利用の方法

医学部図書館のほか最近では多くの病院・研究所図書室でもデータベース端末あるいは通信設備を持っていますから検索方法やシソーラスについて係員が相談にのってくれます。双生児研究会会員のうち、森本・三浦(邦)・松井が常時JOISを利用していますので相談に応じます。実際に検索する場合には検索の実費と資料の郵送料を負担していただきたいと思います。松井は研究室からデータ通信装置を使い直接にJOISや米国のデータベースにアクセスしていますので興味をおもちの方はご連絡下さい。意外と簡単に、安価に検索が出来ます。

#### 4) データ通信とは

パソコンに信号変換装置をつけ、通信（電話）回線でデータの送受信を行うことです。必要なセットは、①パソコン一式（CPU・ディスクドライブ・モニター・TV・プリンター）、② データ通信用ソフト、③信号変換装置（モデムまたは音響カプラー）、④電話（直通が望ましい）、⑤その他。以上の用意のほかに通信の相手先（会社）と契約を結ぶ必要があります（JOIS=INDEX MEDICUS あるいは医学中央雑誌(1981-)、その他・米国のデータベース（日本の特約店で契約ができる））。米国に直接データ通信をするとわが国に導入されていない各種のデータベースを利用することができます。

#### 5) その他の文献リスト

ACTA GENETICAE MEDICAE ET GEMELLOLOGIAE (TWIN RESEARCH) の巻末に INDEX MEDICUS 収録の文献が再録されています。

表1 MEDLINE による双生児研究論文件数

近藤郁子	遺伝要因 genetic factor	24
	環境要因 environmental factor	13
高島敬忠	奇形 malformation	46
	成人病 adult disease	11
	老化 aging	12
	生活様式 life style	0
浅香昭雄	行動（遺伝学） behavior(al genetics)	79
中村泉	季節（性） season(ality)	15
	母親 mother	40
	母胎要因 maternal factor	169
	成長 growth	124
天羽幸子	思春期 puberty	9
	相関関係 correlation	1
	心理 psychology	28
今泉洋子	多胎 multiple births	379
吉田啓治	双胎胎盤 placenta	40
松井一郎	がん cancer	9
野中浩一	twinning	136
	vanishing	2

## ツインマザーズ・クラブ

(ツインマザーズクラブ 天羽幸子)

㊦ ツインマザーズ・クラブ、文字通り双児のお母さんの会である。会員数1,500、子供が大きくなって、双児の子育てを卒業したとってやめた人もいるので、延べ人数は2,000人以上になる。今年で創立、二十年を迎える。

東大教育学部で双児のことにかかわり、その後、私自身が双児の母親となり、ますます双児のとりこになった。家庭訪問によって幾組かの性格形成などをみているうち、双児の母親は子育てに追われて孤独になり、些細なことでも育児ノイローゼにおちいるのをみて、母親同志が助け合えたらと思って作った。従って特に目的のある活動をしてきたわけではないが、母親達だけの力で、子育ての悩み、その経験談を中心に、年間五回出している会報も100号をこえた。時にはいろいろな方向のアンケートをとって、これをまとめた特集号を出したり、気軽に集まれるような会合を各地区別にわけて行っている。東京やその近郊では特に地区活動がさかんであるが、北海道、北陸、静岡、関西でも地区の世話役を中心に活動している。

話し合いの場に出てくる悩みは、子供の成長と共に繰り返されることが多い。このため二年ほど前に、会報を中心に、母親の生の声を『ふたごのお母さんがんばって』\*という本にまとめ、この本を手がかりに若い会員がふえている。従って会員の双児の年齢は約三分の二が、あかちゃんから小学校低学年でしめられている。

このようなクラブはアメリカが一番多いようであるが、イギリス、アイルランド、カナダ、オーストラリア等とも、時々情報を交換しているが、子育ての悩みは、洋の東西を問わないという感じを受ける。

私はできるだけ母親達がお互いの助け合いでいろいろの悩みを解決するという発足当時からの雰囲気大切に、このような輪の広がりが、地方で心細い思いをして双児を育てている人達に、そして不幸にも障害を持って生まれたような双児の家庭にのばされていくことを願っている。

\* ツインマザーズクラブ、天羽幸子編、『ふたごのお母さんがんばって』、主婦の友社、880円、1984年 (編集者註)

## 聖書の中のふたご達

(東大医学部保健学科 山田一朗)

聖書の中には、少なくとも3組(正確には2組と1人)のふたごが登場する。

第1は、イサク(アブラハムの息子)とその妻リベカの間にも生まれたエサウとヤコブである。第1子エサウは「赤くて、全身が毛衣のようであり」成長して「巧みな獵師、野の人」となった。どちらかといえば思慮の足りない性格で、食欲につられて長子の権利を放棄してしまう。第2子ヤコブは肌がなめらかで、牧羊を営む人となった。穏やかな気質であったが、視力の衰えた父イサクを母リベカとはかってだまし、エサウの受けるべき祝福を奪い取ってしまう抜け目のなさをも持っていた。物語はこの後いくつかの展開を経て、エサウとヤコブの劇的な和解の場面に至る(創世記第25章-第33章参照)。いろいろな面で対照的なふたごが描かれているのは、大変興味深い。

第2は、ユダ(ヤコブの子)とタマルの間に生まれたベレツとゼラフである(創世記第38章)。「出産のとき、ひとつの手が出て来たので、助産婦はそれをつかみ、その手に真っ赤な糸を結び」つけた。ところがその子は手を引っ込め、もう一人の方(ベレツ)が先に生まれてしまった。この時代は長子の権利と責任は絶大であり、特にふたごが生まれたときにはどちらが長子かをまず明確にする必要があった。赤い糸はそのためにつけた物であったが、この場合にはベレツの方が長子の権限を認められ、系図(マタイの福音書第1章)に名を連ねることとなった。

第3は、キリストの12使徒のひとりであるデドモと呼ばれるトマス(ヨハネの福音書第11章)である。トマスは、「私は(キリストの)手に釘の跡を見、私の指を釘のところに差し入れ、また私の手をそのわきに差し入れてみなければ、決して信じません」と語り、「トマスのように疑い深い」という英語の比喩のもとになった人である。復活したキリストに直接出会って改心した。デドモはギリシャ語のデドモス(ふたご)からきた言葉で、トマスはふたごのうちひとりであったと考えられている。ふたごのもう一方についての記事は、聖書の中には見あたらないようである。果してもう一方はキリストに従う者となったのか、それとも迫害する者となったのであろうか。

(聖句の引用は、日本聖書刊行会発行の新改訳聖書によった。)

## 幹事会議事録

昭和62年2月28日(土) 12:00-14:30、東大医学部保健学科S305において、幹事会がもたれた。

《出席者》 浅香昭雄、天羽幸子、今泉洋子、岡島道夫、佐藤幸男、中田稔、野中浩一、早川和生、松井一郎、森本兼麿、吉田啓治、大沼美喜子、山田一朗

以下の事項が報告・協議・決定された。

1. 雑誌『遺伝』に「第5回国際ふたご学会と双生児研究会」(浅香、今泉)の記事を載せることになった。各幹事の所属分野での広報活動が要請された。
2. 創立総会時の井上英二会長による記念講演「日本におけるふたご研究の歴史」のテープがおこされ(山田一朗による)、総会出席者に配布する様要望された。この草稿に井上会長が手を加えた論文が、『遺伝』4月号以下に掲載されることも、『遺伝』編集委員会で決定済みである。また、その別刷について、研究会として100部注文することが決定された。
3. 幹事の分担は以下の通りに決定された。  
庶務・会計担当 : 浅香(大沼)  
次年度大会担当 : 吉田  
文献情報担当 : 松井、森本  
ニュースレター担当 : 今泉、松井、野中、吉田、天羽、早川、中田、(山田)  
監査担当 : 岡島、佐藤
4. 次年度大会日程・場所  
昭和63年1月9日(土)、東京大学山上会館
5. ニュースレターは、年2回6月と12月に発行する。(今年度は特別に4月に発行する)
6. 学生が入会する場合の特典として、在学証明書を提出すれば、年会費を1,500円にすることが了承された。ふたごが入会を希望する場合も、この特典を適用することが了承された。
7. 当日会員として、500-1,000円を徴収する可能性が話し合われた。
8. 『日本人類遺伝学雑誌』掲載予定の「双生児研究会の創立について」に関して、討議が行われた。

(事務局)



— 双生児研究会 第2回学術講演会 開催のお知らせ —

日時： 昭和63年1月9日（土） 1:00-5:00 p.m.

場所： 東京大学山上会館大会議室（予定）

なお、講演会終了後山上会館談話室ロビーにて懇親会を行います。

演題応募要領：演題名、所属、氏名（発表者に○印）、B5版400字詰  
原稿用紙1枚程度の内容抄録をお送り下さい。

締切：昭和62年11月30日（月）

送付先：〒160 新宿区西新宿6-7-1

東京医大産婦人科

吉田啓治 宛

（電話：03-342-6111 内線：5587,5364）

（世話人） 東京医科大学産婦人科 吉田啓治



山上会館

## 会員募集のお知らせ

入会を希望される方は、同封の郵便振替用紙に所属の住所、氏名をご記入の上、年会費を御送金ください。

双生児研究会事務局  
郵便番号 113  
東京都文京区本郷7-3-1  
東京大学医学部保健学科精神衛生学教室内  
(電話) 03-812-2111(内)3584

## 国際ふたご研究学会について (International Society for Twin Studies)

国際ふたご研究学会 (ISTS) の事務局はイタリア・ローマ市のメンデル研究所内にある。この学会はふたご研究をしている研究者、ふたごの親、ふたご自身から構成されている。学会費は年間15ドルであるが、さらに35ドル支払えば年4冊発行されている雑誌 “ACTA GENETICAE MEDICAE ET GEMELLOLOGIAE (TWIN RESEARCH)” が送付されて来る。

なお、この学会への入会用紙は事務局にありますので、ご希望の方は事務局までご一報下さい。 (今泉洋子)

### 編集後記

㊦ Twins に相当する日本語の表記として、ふたご、双生児、双児、双子などがある。ニュースレターの文中にも、いろいろな表現が使われているが、ここでは統一せずに、記事を書かれた先生方の表現をそのまま使用した。なお、第1回設立準備会において、双生児研究会の名称を検討した際にも、いろいろな意見が出されたことを記しておきたい。 (Y. I.)

㊦ ニュースレターのシンボルマークは、Gemellology のGと早期の双胎児の超音波像の形にちなんだものです。如何がでしょうか? ご意見をお待ちしております。 (K. N.)